奈良へ来てよ」というような感じで連れてこられて、たまたま、開眼に間に合ったということで、開眼の導師を務めていただいたということです。
　それで、菩提僊那というお坊さんだけが堂がなかったんですが、それで今回新しく御堂を造って、その１０月１５日の一番最初のその時に、その開眼も兼ねてということを予定しておるわけです。
　本来は、鑑真さんを呼んできて、その開眼の導師をやっていただこうという予定しておったようなんですけども、たまたま、５回遭難されましてですねえ、６度目についていただいた時は、もう開眼法会は済んだ後だったわけで、ちょうど、菩提僊那が間に合ったということで、国際色豊かに、奈良時代開眼の法会を務めたということでございます。

川崎編集長
　ありがとうございます。

井戸局長
　榊田さんの方から何か。

榊田副編集長
　廣川先生にお尋ねしたいんですが、私もボランティアガイドの説明は素晴らしいなあと思っていたんですが、ボランティアガイドをもうちょっと増強しようというお話されていましたね。
　そういうのって、東京にいますと、なかなか情報として手に入らない。
　例えば、パンフレットですとか、ガイドブック、既に刷ったものの中には、なかなか手に入れにくい情報というのが結構ございますねえ。例えば、ホームページか何かわかりませんが、ここに行ったり、これを見たりすると、レアな面白い、京都の情報が手に入るよとか、そういうものっていうのはございますか。

廣川教授
　残念ながら、まだ、完全に出来てると思わないんですよ。北村さんの京都館が東京ではそういうひとつの役割を果たしているかも解りませんし、様々なホームページ開かれてるんですが、本当の意味での、ここを知りたいというものがあるんだろうかというふうに考えてます。
　たまたま、小学館さんが、いい「古寺巡礼」をお作りでございますけれども、比叡山のほうの考え方としては、もう少しそれを持って歩けるものが出来ないかなあとか、社寺名鑑とは言いませんけれども、何かひとひねりしたものが出来ないかという、今そういう模索中でございます。
　で、これ東京でしておりますので、一言だけ付け加えますけれども、まあ京都の観光というのは、「花の都めぐり」ということなんですよ。これは「花のお江戸」からのお客様が圧倒的に多かったと思うんであります。世界文化遺産の、上賀茂神社、下賀茂神社とか延暦寺を、別にして、仁和寺にしても稲荷にしても、よく「先ほどの戦で焼けてしもうた」って言われるんですねえ。先ほどのとか前のとかって、「いつ」やと思われます。応仁の乱なんですよ。
　例えば、稲荷行ってもそう言われます。「前の戦で」。応仁の乱なんですね。で、その後で、まさに家光の時代に、家光の力によって、例えば当時の塔もそうでございましたし、復元されていきますよねえ。あの時の復元のポイントは、古代に返そうという、古典復興だと。様式が。だから、そういうふうなところに、もう一度かえっていったら、あの時代に、「都名所図絵」というのが大流行いたします。同じように、その後で「江戸の名所図絵」が出来ますけれども。その名所図絵をですね、「源氏物語」に対応させてますけども、３０数ヶ所重なってくるんですね。
　で、今のお寺とか、神社とかというのは、明治のご維新で、せばめられ、或いは、市街化することによって変わっていったけれども、あの時代にもう一度帰れないのかと。そうすると、膨らみが出てくるの違うかと。だから現代の写真だけではなくて、「花の都の時代」ってのは、一体何であったんだろうかと。

幸いにして、京都の山河は、そう大きな変化はしておりませんので、或いはお寺の境内、神社の鎮守の森は非常に大事な意味を持っておりますし、下賀茂神社で、セミの小川が発掘され、清水であったと。そういうふうに京都というのは、だいたい地下２、３ｍ下に平安京があるんです。そういうこの発掘の調査、それから、そういうな図絵などを扱いながら、もう一度バーチャルかも知れないけども、京都を見ていただきたいなあと思います。そういうものが観光物であるとか、今おっしゃったような、いろいろなメディアを通しながら、出て行ったらいいなあと思っております。

井戸局長

京都も奈良も一緒だと思うんですけども、この中には非常にいいものがあったり、学者の先生方の研究室の中には非常にいいものがあったり、市民１人１人の中にいろんないい情報があるんだけども、それがやっぱりうまく発信できてなかったり、先ほど上野先生もおっしゃってましたけども、若干その、東京の方に流れている情報との懐疑があるみたいなところがおそらくあるんだと思うんですけども、廣川先生の今度作られた、観光文化振興会なんかは、京都市内ではそういうコーディネートの役割をしていかはることになるんでしょうし、おそらくそういうことだったら、あの人か、あの人か、この人に聞いたら、誰かは教えてくれるんじゃないかとかですねえ、やっぱ、二重、三重のその口コミのバリアを、何とか、首都圏の方にも、突破しやすいように、我々も頑張っていきたいなあと思てるんです。

上野先生、特に、奈良、飛鳥っていうのは、今、修学旅行が随分変わってきてたり、日本史が必修じゃなくなったり、ましてや、日本史の中でも、戦後史が増えた分、古代は減ってますわねえ。そういうふうな流れがあったりする中で、当然その、先生方のご活躍の分野も増えてきてたり、何て言うんでしょうか、語り部の方々の活躍の場も増えてきているというようなことだと思うんです。、まあ非常に奈良的には、やっぱり、一定の学習的素養がないと、いけないところがあって、これからそのギャップをどう埋めていくのかという課題があろうかと思うんですが、何かコメントありましたら。

上野副所長

私、あるイベントで、モーニング娘さんと一緒に共演さしていただいたんですが、この娘たちが、４０歳になった時に「サライ」を読んで、果たして奈良や京都に来るだろうかというふうに、思いました。ひとつやっぱり、この歴史街道を中心とする地域の観光は、井戸さんが言われたように、学習型であって、ある程度それをちょっと知っていることを実感する。「あっ、大仏ってこんなに大きいんだ」とかですねえ、あのう、歴史色を実感するっていうことで、そのためにはある程度その、高度化が必要ですねえ。

例えば、私の場合だったら、例えば、吉野に行って下さいよって。吉野では、天武天皇、こんな歌を歌ってます。

「よき人の、よしと良く見て、よしといし、吉野よく見よ、よき人よく見」という歌。

「えっ、そんなに吉野って、よしよしって出てくる歌があるんですか？」とか言われます。「それ、口ずさんでみてください。」とか「覚えて帰ってください。」というような形から、また吉野の歴史の話をしていくっていうことになると思うんです。

ひとつはやっぱり、研究室の中にある、正倉院の中にある、というようなものを、いかに発信していくかっていうので、いろんなコンテンツが増えて、選択肢が増えてきていると思うんですね。で、そういうものをもっともっと、活用していくことが、この地域のひとつの魅力というものを引き出す大きなことになりますね。と同時に、もうひとつは、それは、その時代にとってみれば、例えば、平安京なら平安京っていうのは、その時は先端的なものだったわけですよね。平城京もその時は先端的なものだったわけですよね。そうすると、逆に現代アートと、何かが合わさっているもの。で、ちょっと昨日はですねえ、万葉集の時代の食材を使って、フランス料理のフルコースを作ったんです。あるホテルで。で、そうしましたらね、あの「蘇」と言いまして、チーズの原型にな

るものを、パルメザンチーズの代わりに使ったリゾットにしたんです。で、そうすると、「えー、こういう食べ方があるのか。」と。
　ですから、何かこうもうひとつ、今の魅力、高度化して歴史を勉強しましょう。学習型で頑張りましょう。というのと、もうひとつは何か新しい、そういう試みをどんどん発信していくっていうようなことに、まあ学者もある程度、勉強のかたわら、係わっていく必要があると思ってます。

井戸局長
　だいたい、僕らの世代、或いはもうちょっと年上の世代、歴史とかあまり好きじゃなくて、やっぱり、お父さん・お母さんの口コミみたいなものも含めて、その何とか日本人のＤＮＡをですねえ、途絶えさせない努力をしていかなきゃいけないと思うんです。
　おそらく読者層的には、三誌とも、まあ４０代、３０代後半からの方々だというふうに思うんですが、そういう方々に、日本のことを伝えていくにあたって、或いは、その、京都・奈良を取材するにあたって、考えていらっしゃることとか、或いは不便に思ってらっしゃることとか、何かご感想ありましたらお願いしたいんですけど。川崎さん、いかがですか。

川崎編集長
　先ほど控え室で、９月の１１日以降、非常にまあ、京都も奈良も、お客様が戻ってきたというようなお話を聞きましたけれども、非常に、それより以前から、４０代以上の中高年の方々、特に女性を中心にした読者がうちは多いんですけれども、「テーマのある国内の旅」っていうのは、非常に求められていると、いうふうに感じていました。で、ほぼ毎月に近い形で、国内、見所のあるところ、もちろん、「自然環境」というテーマの時もあれば、「お菓子の文化」みたいなテーマの時もあれば、なんですけれども、その中で、やっぱり、地域、地域によって、多少良かったり、反響が良かったり、悪かったりっていう時があるんですが、京都と奈良、この２つに関しては、多分、こちらにいるお二方もそうだと思うんですけれども、編集者にとっては、雑誌にとっては、なんか一瞬、「宝の山」のように見えるんですね。
　やると、必ず当たると。ただですねえ、やはり、上野執事長さまのほうがおっしゃってたかと思うんですけれども、あまりにも、ステレオタイプな紹介の仕方をしてしまいますと、非常に読者の方が、逆に離れていくと。あのう、だから、宝の山に見えて、非常に難易度の高いテーマだというふうに思います。それこそまあ、桜や紅葉にひっかけて、テーマを組むこと、あの、綺麗な写真を組み合わせれば出来るんですけれども、そうじゃなくて、やはり、リピーターの方々、京都・奈良、何度も行かれた方々にとって、何が今、一番こう興味が持たれるんだろうかとか、潜在的にない興味をどう引き出していくんだろうか、みたいなところに、我々も含めて雑誌作りの方々は、常日頃、頭を悩まされているんじゃないかなと思います。
　今日、こちらのフォーラムのほうに伺って、京都館の所長さんのほうから、五感を大切にするというような、それは旅のプランニングの中でお考えになってる企画だと思うんですけれども、そういったものって、もしかしたら雑誌に置き換えると、新しい切り口が出来るんじゃないかなとか思いました。「源氏物語」とか「万葉集」とかも。
　今日、いろいろお話も伺いましたし、ここに来ると、ほんとにいろんな情報がある。でも、何となくこう、まだ東京のほうに、距離的にも心理的にも、なんていうか、肌感覚的にまだ届いていないところがあるし、それはもしかしたら、私たち東京サイドの側も、自分たちの知ってる範囲だけで探さないで、もっともっといろんな交流をしていったらいいのかなあというふうに、いろいろ考えた、今日のフォーラムでした。本当にある意味、もっともっと、いろんな形で「こんなものはちょっとなあ」なんていうふうに、もしかして地元の方、もう些細なことでも発信していただけると、今日も町屋のテーマとかも非常に面白く感じましたし、まあそういった意味で、「ちょっと距離がまだ、あるんじゃないかな」というふうな感想を持ちました。

井戸局長
　榊田さん、いかがですか？

榊田副編集長
　人間、年齢を経ていくと、自然というものと、古いものに対する興味が、増えてくるようなんですね。うちの雑誌でいいますと、やはり、山歩きをなさる方、それから山歩きまでいかないにしても、散歩をしながら、その辺に生えている草花をめでて、写真を撮られたりとか、スケッチをされたりっていう読者の方が非常に、増えております。そういう意味でいうと、確かに山とは違いますが、京都・奈良というのは、古いものと自然、豊かな自然というのが一緒に見られる、素晴らしいところなんですね。ええそれで皆さん非常に興味をお持ちだろうと思うんです。ただ、確かに、川崎さんおっしゃったように、「宝の山」なんですが、あまりにも、各、媒体こう、京都扱ってるので、毎回、毎回「どうしたもんかなあ、普通の情報じゃあ、読者の方満足していただけないだろうなあ」というのが、こちらとしては、悩みの種ではあるんです。ですから、今日、伺いまして、ソフトの部分の充実というのを考えてらっしゃるなあと。それはボランティアにしてもそうですし、廣川先生がずっとおっしゃったように、「物語と絡めた旅」というあたりは、非常に参考になるなあと思います。
　あと、万葉文化館のところで、伺った時に、あれは「ポータブルナビ」でしょうか。実験というのをされてまして、使い方も、慣れればそんなにこう難しくはない、小さいサイズのナビゲーションなんですが、地図が出てまして、自分が行きたい観光コースを設定すると、道案内をしてくれるとか、そういうことの実験がされてまして、それは非常にいい試みだろうなあと。まあ、地図を見ながら歩くという楽しみもあるんですが、地図を見なくてもいい安心感というのも非常に大きいと思うんですね。ああいう実験をされてるというところに、非常に魅力を感じまして、個人的には、ゆっくり京都・奈良見たいもんですから、あんまり人が多くても困るんですが、そういうところで、変わっていくのかなあという気がしております。以上です。

井戸局長
　中村さん、いかかですか？

中村編集長
　はい。私も二人と一緒のところはあるんですけど、ほんとに、秋の京都とか、春の京都とかですねえ、奈良とか、蓋開けてみて、他の雑誌と、「ああ、かぶらへんかった、良かったあ」っていうような、そういう状況で、毎年ドキドキしながら、雑誌作っとったりするんですけど、聞くとですねえ、「なんかまだまだある」って言うんですけど、そのまだまだあるところが、本当になかなか、こっちも探せないし、まいこと引き出せないです。
　あとやっぱり雑誌作っとって困るんはですねえ、ほんと、長年のことなんですけども、撮影できへんとこ、撮影許可降りへんとこ使こたら、志納でいいと言われるんですね。「いくらなんでも、こんな金額やったら、恥ずかしいかな。」とかですね、あのう、その文化財の保護っていうのと、「何とか撮りおろしのレアな写真を使いたい」っていう、「その編集つくりてえ」と、現地で、いつも悩まされるんです。だから、「ある程度、こう、ええとこも、ちょこっとずつ作っていってくれると嬉しいなあ」と、思たりですねえ、期間限定でもいいから、「今年はええ企画出した、三社にだけ、撮りおろし許したろ」とかですねえ、「そういうの、なんとかしてもらえやんかな」と、いうふうに、奈良で偉い人が１人みえてるんで、「僕は頭やわらかいよ」とおっしゃってたんで、ちょっと今、お願いも兼ねて、恐る恐る言うてみました。それとですね、何て言うんですか、奈良・京都って、やっぱり根本のところで、一緒の、さっき、古都って一緒になっとるっていうふうに言われましたけど、私たちも反省せなあかんとこあるんですけども、やっぱ奈良と京都は、ほんとは全然違うやないですど、「奈良のお寺は靴脱がへんやろ、ほとんど」とか言うて。京都のお寺は、

冬行ったら、みんな、結構寒いですよねえ。ストッキングなんかで行くもんやないですよね。っていうとこあるやないですか。それもこれもやっぱり、平安京と平城京のいろんな建築様式やったりそういうのの違い、それひとつ聞いただけで、「あ、なんか全然ちがうなあ」という気がして、「私は奈良が好き」「私は京都が好き」ってあるのも、当然やなあっていうふうに思って、そういうところを、なんか「もっと伝えていかなあかんなあ」と思うし、みんなが面白がってくれるような情報を出したいですね。

井戸局長
　どうもありがとうございます。もう時間がきているんですけれども、６人の皆さんの中で、最後、もう一言これだけという方、いらっしゃいましたら。

廣川教授
　一言というか、お願いございます。これは、横に東大寺さんがいらっしゃるから申し上げるんですけれども。先ほど、休憩所で話聞いてたら、宗派ごとの交流はある。いろいろ仏教のある。しかし、観光からしたときに、必ずしも宗派でいくわけではないなあ。とおっしゃっておられた。
　実は、私ども京都のほうでは、あのう、百箇寺巡礼とか、百社巡拝とかっていう、別に百にこだわりませんけれども、そういう達成感を持った、お寺歩き、神社歩きを提案しようと思っているわけです。これは、先ほど申しました、先ほどもおっしゃってたように、「自然が好きな人」「歴史が好きな人」そして「自分さがし」、そこんところが、お寺歩き、神社めぐりでいいんやないかと、思ってるわけです。その時に出来れば、僕は奈良と京都の、お寺歩きを結合するとか、集印を頂戴しながら、そんなことができたらなあと思っております。我々が作るだけではなくて、まさに交通機関が、奈良と京都をうまく結んでくださって、そういうもの利用しながら、出来たらいいなあと思っています。これからどうぞよろしくお願いいたします。

井戸局長
　上野執事長、一言お願いします。

上野執事長
　今回の展覧会、これは文化財の保護の立場から申しますと、これはもう動かさないほうがいいに決まってるわけです。動かして良くなるということは、めったにないわけでございます。それと、やはりわれわれ、信仰の対象、そこのご本尊としてですねえ、やはり、もちろん、法要もしてお守りもしておるわけでございますけれども、まあそういう美術的な価値をひとつは多くの皆様方に、再認識していただくという意味で、今回、こういう大規模な展覧会を催すことになったわけでございます。めったにない機会でございますんで、是非お出まし頂きたいと思います。

井戸局長
　ありがとうございます。上野先生いかがですか。

上野副所長
　はい。歴史を体感するっていうようなことをテーマにした時に、いろんな切り口があって、私たちは、そういう切り口、新しい切り口というものをどんどん開発していかなくてはいけません。でまた、そういうところを救い上げて、地域の活性化のために、歴史街道推進協議会を中心とした、首都圏の方々のお力を借りたいと思っております。ありがとうございます。

井戸局長
　ありがとうございます。いろんなテーマが出て、短い時間でまとめきることは不可能なんですけ

ども、ひとつは情報の問題、伝え方の問題、プレゼンテーションの問題、整理の問題、というのが、ひとつ私どもの課題としてあるんだと思います。ただ、今日のシンポジウムにつきましては、学会の方、或いは宗教界の方、京都の方、奈良の方、鉄道会社の方、みんなが今日をきっかけにして、もっともっと、円滑にいろんなことをやれるようにということの主旨も含めて、開いたつもりでございますので、是非、いい方向に向いてくようにという様に思っております。それから、マスメディアの方々、いつも「どういうテーマを選ぶんだ」、「どこに取材に行くんだ」、「写真どうするんだ」、いろんな、お悩み事あろうかと思いますが、出来る限りのことは、私どものほうでお伝えしますし、またそういうマスメディアの一押しがないと、なかなか文化の伝承も難しい時代でございます。それと、ほんとに不思議なことなんですけど、例えば、山の辺の道を歩こうというと２０００人集まるんですよね。ところが、そんなの自分でも歩けるんですよ、本当は。みたいなですね。ちょっとした一押しみたいなことが、やはりこれからあの、日本の文化・歴史を伝え、活かしていくのに大事なことだと思いますんで、是非とも引き続きのご協力をお願いしたいと思います。今日はちょっと短い時間でございましたけれども、また、今日を契機にいろんなことやっていきたいと思いますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。それでは、今日のシンポジウムにつきましては、こちらで終了さしていただきたいと思います。どうもありがとうございます。

（質疑応答）

Ｍ　Ｃ

　ありがとうございました。せっかくの機会でございますので、もし会場のほうで皆様のほうからご質問「どうしてもあります」という方、いらっしゃいましたら手を挙げておっしゃってください。

中津さん

　地図のゼンリンの中津と申します。今まで素晴らしいお話、議論、伺ったんですけども、地域の広がりっていう点、お考えいただければいいんじゃないかというのがございます。それは、先日、昔の豊前の国、今の福岡県・大分県あたり行ってきましたら、京都郡という地名がございました。で、なぜそこに京都という地名があるのか。それから、福岡県のある地域に行きますと、明日香の地域と、地形とか地名が非常によく似てるというのはあって、どうもそこらに何らかの関連があるんじゃないかと言われる。それから、関東との関連で言えば、コウゲ、下毛と書くんですかね。で、ケという、髪の毛の毛ですが、その毛野という地名が栃木県や群馬県に再現されていて、上野（こうずけ）・下野（しもつけ）と言われている。で、宇都宮という地名も、実はその、福岡県にございまして、これ、栃木県にもありますねえ。ということは、日本の歴史で、まだ良く知られていないけども、いろんな関連が地域間にある。そういうことを、ここはまあ関東ですけども、関西の方に行った時、或いは、北九州方面行った時に、或いは九州の方に来てもらう時に、それぞれ、どこかでつながりがあるかもしれない。それはまた、勉強・研究の課題かも知れませんが、そういう広がりという、捕らえ方、プレゼンテーションが、あってもよいように思います。いかかでございましょうか。

上野副所長

　例えば、大和に三輪山がありますけれども、先ほど言われた福岡県には、三輪町という町がありまして、それは斉明天皇がなくなった場所でもありまして、人の意図、つまり、地名というものは、人の意図を伴っている場合もあるわけです。で、明日香という地名でもですねえ、河内の明日香もありますし、この東京でしたら明日香山の明日香ということもあります。同じような地名もあります。ですから、そういうような、あのやっぱり高度化の中で、地名のちょっとした関わりみたいなものも、とっかかりにして、歴史とか文化とかを考えていくっていうような、今、切り口でご提案いただいたので、私なんかも、福岡などで講演会よくさしていただくので、そういうところを切り口にさしていただくいい提案いただきました。ありがとうございます。

廣川教授

今のことは、非常に面白いテーマになっています。先ほど、「地名」ということ申しました。「地名」というのは、まさに歴史を記憶しているわけだし、その周辺に「物語」があるんだと申しました。その関連が、これからの問題だなあと思っております。特に、東京というか、江戸と京というのを比較したときに、ご承知のとおり、延暦寺に対して、寛永寺でございます。もちろん、延暦、その澪につくられたものと、寛永の澪がありますし、比叡山に対して東慶山延暦寺。東の比叡山の延暦寺ですね。そういうふうに都の持ってたものが、江戸に、アレンジされながらあると。

それからもうひとつ、是非東京の方、私どもよりも、よく見る機会があると思うんですけれども、大名庭園が残ってますよねえ、いくつか。行きますと、必ずといっていいぐらいに渡月橋があるんですよね。大名庭園の中に、江戸の中に。木の橋であったり、石の橋であったりします。そういう、この名称の成立というようなものが、庭園の中に組み込まれていくっていうことがあります。西の方にまいりますと、お山を造って、これは富士山っていうような。そういうふうな景観を、お互いに模し合っていくっていう、そういう楽しみがあったように思います。地名の問題とそういう風土の上に立った景観の問題というのが、ほんとは旅の１つの重なりとして、面白いのではないかと思っております。

‘（終了）

7. 座談会出席者プロフィール

廣川　勝美（ひろかわ　かつみ）
京都観光文化振興会代表理事・同志社大学文学部教授
同志社大学大学院文学研究科修士課程国文学専攻修了
日本歴史文化学会会長・文学博士
『ものがたり研究序説－伝承史的方法論－』（桜楓社）『犯しと異人－昔話の基層－』（人文書院）『深層の天皇－源氏物語の古京－』（人文書院）『源氏物語探求－都城と儀式－』（おうふう）『源氏物語の植物』（笠間書院）『源氏物語　地名と方法』（桜楓社）など編著書多数。

上野　道善（うえの　どうぜん）
華厳宗宗務長・東大寺執事長
龍谷大学仏教学科卒業
東大寺大仏殿副主任、東大寺学園常任理事、華厳宗庶務部長・東大寺庶務執事、華厳宗財務部長・東大寺財務執事、華厳宗管長代行・東大寺住職代行を経て現職

上野　誠（うえの　まこと）
奈良大学文学部国文学科助教授・財団法人奈良県万葉文化振興財団万葉古代学研究所副所長
福岡県生まれ
国学院大学大学院文学研究科博士課程後期単位取得満期退学
著書『古代日本の文芸空間－万葉挽歌と葬送儀礼』（雄山閣出版）『風呂で読む　万葉挽歌』（世界思想社）『万葉びとの生活空間－歌・庭園・くらし－』（塙書房）『芸能伝承の民俗誌的研究－カタとココロを伝えるくふう－』（世界思想社）ほか論文多数

川崎　阿久里（かわさき　あぐり）
世界文化社「家庭画報」編集長
新潟県生まれ
早稲田大学第一文学部卒業
1980年株式会社世界文化社入社。「家庭画報」ならびに「きものサロン」の編集に携わる
1998年より現職

榊田　一也（さかきだ　かずや）
小学館「サライ」副編集長
埼玉県生まれ
早稲田大学商学部卒業

1982年株式会社小学館入社。辞典編集部を経て、1989年から「サライ」創刊に携わる
「ビーパル」編集部の後、1999年より現職

中村　直美（なかむら　なおみ）
交通新聞社「旅の手帖」編集長
三重県生まれ
早稲田大学第一文学部卒業
1980年株式会社弘済出版社（2001年12月より株式会社交通新聞社に社名変更）入社。国内外の旅行記事の企画・編集に携わる。企画広告部企画課長を経て、1999年より現職

コーディネーター
井戸　智樹　　歴史街道推進協議会事務局長

8. アンケート集計結果

◇開 催 日 :平成14年2月22日(金)

◇開催場所:キャピトル東急ホテル

◇タイトル　:　歴史街道フォーラム 『歴史街道計画10年のあゆみと京都から奈良への旅』

◇主　　催　:歴史街道推進協議会、社団法人関西経済連合会、国土交通省

◇参 加 者 :首都圏の旅行関係者、マスコミ、一般　　など　　約120名

Ⅰ　男女別

男性	女性	不明	合計
26	6	9	41

Ⅱ　地域別

東京都

江東区	中央区	練馬区	豊島区	世田谷区	左記以外(不明)
2	1	1	1	1	11

千葉県
2

不明
22